

セ・ア膜電気泳動の開発者 J.Kohn 博士を迎えて

電気泳動学会春季大会

第36回電気泳動学会春季大会が、6月6、7日の両日、野口英世記念会館(東京都新宿区大塚町)において、北村元仕大会会長(虎の門病院)の下に開催された。本学会は、電気泳動という一つの分離分析技術を核とするユニークなものであり、今大会でも、内科、外科、臨床検査学、臨床病理学、法医学、獣医学、生化学、生物学にわたる広範な分野から、医師、検査技師、基礎研究者ら248名が一堂に会し、それぞれの分野で得た知見や研究成果を持ち寄って、活発な討論が行われた。そもそも電気泳動学会は、1950年に、その前身である蛋白泳動研究会が発足したことに端を発している。その9月に、関西電気泳動研究会と合流して電気泳動研究会となり、同年11月には第1回目の電気泳動研究会が開かれて、児玉桂三博士が初代会長に選任された。さらに1957年の第9回電気泳動研究会において、同研究会は発展的に解消され、電気泳動学会が設立されるに至った。そして、毎年秋に開催される総会の回数はそのまま受け継がれ、関東支部大会は春季大会と改称された。

本学会には、1961年に制定された学会賞(児玉賞)があり、機関誌「生物物理化学」に掲載された優れた研究業績に対し授与されているが、さらに本年は、1983年に東京で開催された第3回国際電気泳動学会(平井秀松大会会長)を記念し、世界的レベルで電気泳動技術の開発および応用に寄与した優れた研究業績を褒賞する平井賞が、新たに制定されており、今大会において第1回の平井賞がセルロースアセテート(セ・ア)膜電気泳動の開発者の一人であるJ.Kohn博士(The Royal Marsten Hospital)に授与され、同博士による受賞講演が“30 years of cellulose acetate electrophoresis: methodology and application”と題して行われた。

また、大会初日の午後、一般演題に先立って、酵素結合性免疫グロブリン検討小委員会(菅野剛史委員長[浜松医大])の最終報告が行われた。酵素結合性免疫グロブリンの発見は、電気泳動による臨床検査の成果の一つであるが、健康人にも比較的高頻度で見られることや、特定の疾患との関連が見いだせない場合が多いなどの問題が指摘されており、検査室から臨床医への報告に際しての指針作りが望まれていたものである。



Dr. J. Kohn 博士による講演

今回の最終報告は、1980年から進められていた検討の締めくくりともいえるものである。これまでの活動の経過が報告されるとともに、「酵素結合性免疫グロブリン例の疾病分類をする場合の約束に関する提案(昭和60年11月26日付)」および「酵素結合性免疫グロブリンの出現例において、アイソザイム分画の報告をする場合の指針(昭和61年2月10日付)」の概要が改めて紹介された。

一般演題では、新技術に関するもの(12題)、酵素結合性免疫グロブリンに関するもの(5題)、レクチンを用いた電気泳動に関するもの(5題)など50題が、すべて口演で報告された。新技術に関する演題の中では、電気泳動およびパターン認識の自動化に向けたものが目立ち、デンシトグラムの正規化(金子伸隆氏、他)および、特徴点の検出理論(菅野剛史博士、他)などが報告された。酵素結合性免疫グロブリンに関しては、H鎖、M鎖単独でもLDH_{2,3,4,5}と強い親和性を示す、IgG-λ型M-蛋白の例が、藤田清貴博士らによって報告され、酵素と免疫グロブリンとの結合様式に、新たな疑問が提示された。レクチンの利用では、allo Aレクチン非反応性αフェトプロテインの腫瘍マーカーとして有効性が武田和久博士らによって報告された。

今大会では、口演10分討論4分という比較的ゆとりのある時間配分がなされていたこともあり、例年になく活発な討論が行われた。また、特に若手の参加者から活発な質問がなされており、今後の本学会の発展が期待できる大会であった。なお、次回の第37回電気泳動学会総会は、10月17、18日の両日、熊本市産業文化会館において、高月清大会会長の下に開催される予定である。(東京都老人総合研究所生化学部 戸田年純)